

J.PIAGET



Geant de la psychologie du xxe siècle ,fondateur de l'épistémologie génétique

7月24日25日 SUMMER SEMINAR 2013

第17回夏季研修会 会報誌 主催：日本ピアジェ会 後援：株式会社メイト



C O N T E N T S

『ピアジェ理論と幼児教育の実践』

斎藤 法子・・・P3-4

ベタベタシール遊び実践発表について

助言者 大石 富士子・・・P5

べたべたシールあそび実践発表

【師勝はなの樹幼稚園・東山東幼稚園
鴻池学園幼稚園】・・・P6-8

文学紀行No.27

「わたしはだあれ？」
石川 晴子・・・P9-11

認識・感情・道徳について

カリフォルニア州立大学付属教育大学
名誉教授 齋藤 法子

感情防衛



今回は認識、感情、道徳について触れていきます。まず、最近日本では子ども達の道徳観が低下しているとの報道がありました。この道徳観は大人から子どもへ教えるだけでは意味をなしません。子どもが自分で考えていかなければならないものです。

さて、それではまず道徳と深く関係している子ども達の感情についてピアジェ理論をみていきましょう。大人であれば、ストレスが溜まったり、嫌な経験をした時は、友達や恋人に話をして感情を伝えて安心したりするものです。しかし子どもはまだこの感情を人に伝えて気持ちを解消することができません。そこで遊びや模倣を通してこの感情を出して補っていきます。ピアジェ博士は遊びは子どもの感情を防衛し、且つ精神を安定する役割を持っているとしています。ある日、ピアジェの子どもジャックリーヌは上の写真のような背の高い子ども椅子に乗ることに恐怖を抱いていました、すると、人形をその椅子に乗せて「大丈夫よ、怖くないのよ。」と話しかける様子が見られました。人形にその恐怖の経験を代理でさせて自ら安心しているかのようです。



さて、左記の写真は砂に置かれた様々な玩具を使用してカウンセリングをしている所です。普段禁じられていることを人形に経験させて遊んでいます。例えば

怒りを持っている子どもは、人形同士戦いごっこをしたり、叩いたりして、怒りを中和させていきます。このように遊びで発散させて、感情を防衛していることがわかります。



またスーパーマンやアンパンマンのようにマントを着て、英雄になる模倣遊びが幼少期にはよく見られます。この英雄遊びを通して、自分の勇気を奮い立たせたり、自信を取り戻したりすることにも役立っています。

道徳



皆さん、道徳についての本を読んだことがありますか。日本人に調査したところ、買って読んだ人が5%、92%の人が興味がない、もしくは今後読むかもしれないと答えました。一般的に道徳への関心は高いとはいえませんが、大変大切な問題です。早速ピアジェ理論を見ていきましょう。

道徳は発達段階に沿って、子ども自身で道徳観を構成していきます。よって道徳を教えてもあまり意味をなさないものです。認知の発達はそれぞれ0歳から2歳の感覚運動期、2歳から6歳の前操作期、6歳～12歳の具体的操作期、12歳以降の形式操作期と発達していきますが、道徳の発達過程は自己中心から他律性そして自律へと移行していきます。しかしこれは認知のように年齢と共に発達するものではなく、例え40歳になっても自己中心の殻を破れない人もいます。よく自分だけが正しいと判断したり、客観的に判断出来ない人がいますね。

例えば、「お母さんが病気になりました。その病気を治す法外に高い薬を買うお金がありません、あなたならどうしますか」と質問してみます。

自己中心の時代は「薬を盗まない、なぜなら怒られるから」「盗む、ママが死んだらご飯を作ってくれないから」と答えます。これは何も子どもに限ったことではなく、「主人が死んだら、生活はどうなるのかしら」と自分中心で物事を考えて判断する人はこの発達段階の人だといえます。

次に他律的な段階の人はどう考えるのかを見ていきましょう。「警察に行く、自分では盗まない。」「盗んだら、牢屋に入ってしまう。」「法律を遵守して薬は盗みませんが、考えが決められた法律重視で他律的と

いえます。

最後は自律的な判断をする人です。「法外な値段の薬を売る法律を変えるべきだ」「病気が人が買える値段にするべきだ」と根本的な解決で人権を考えていく段階が自立的な段階です。下記に表で示しておきます。

段	正しく思う	理由	道徳段階
1	規則の服従	罰を避ける	自己中心
2	規則は自分の為交換	他の関心を無視	自己中心
3	上位の期待に沿う	良人に見て欲しい	他律性
4	規則、法律を重視	良心と義務感	他律性
5	価値観差の認識 自由、公平に関心	福祉、権利の保護 法律の矛盾を認識	自立性
6	人権、平等の尊重 原則違反法律と戦う	道徳の原則は 理性的人間の責任	自立性

道徳保育

それでは、年齢と共に発達することがない道徳ですが、どのように保育に取り入れて、自己中心性から自律へと促すことができるか見ていきましょう。道徳の保育とは、正悪の区別が出来る、人権や不公平等を考える保育を指し、故に子どもの思考力、自立、理性を養う保育のことをいいます。

まず、批判的思考をしてみることです。例えば、こそそ話をしたり、いじめをしたりすることについて、相手の立場にたって考えて、自分がされたらどう思うか、子ども達に考えさせます。また、人権でいえば、不公平な写真や本を子ども達自身で身の回りで探してみます。そこでなぜそれが不公平だと思ったのか、子ども達で考えていきます。これはほんの一例ですが、子どもに考える機会を与えて様々な取り組みが出来ることと思います

重要なことは、相手の立場で考えることにより、自己中心から離れていくことを促すことです。

道徳保育での先生の役割



次に道徳保育での先生の役割を見ていきましょう。まずは、子どもに好奇心を持たせる。これは先生の介入が必要な時があります。自然と子どもが好奇心を持つように環境を工夫をします。次に、活動は子ども達に従事させます。子どもたち自身で活動をしていくことが、批判的に物事を見させる秘訣といえま

す。してしまいがちな保育はただ、教諭は子どもに伝えて満足する保育です。ここで肝心なことは実際に子ども達が気付いたことを行動に移して見ることです。例えば、園内で身障者に不便な箇所を見つけて、改善するために実際に行動に移して見る等です。

また子どもに興味・関心を持たせる保育環境にはどのような工夫があるのでしょうか。特に私が住んでいるアメリカでは様々な人種がいます。子ども達が多文化に自然と触れる機会を用意して認識を深めていく用意は必須といえます。それから補聴器や眼鏡等の人形や本を置いたりしてハンディキャップへの理解を深めます。それから家族でも両親が居る家族だけでなく、片親の家族、離婚した家族、最近では同性の家族、と様々な形態があることを考える機会を作ることも認識を深めることになるでしょう。また職業でも同様に消防士や看護師、保育士、八百屋さん様々な職種のおもちゃを置き、環境を整えてあげることもできます。

共感

ところで、赤ちゃんは1歳になるとすでに原始的な共感の行為が見られます。泣いている他の赤ちゃんを見たり等です。この共感する能力は勝手に育っていくのでしょうか。最近の研究から、この共感環境から学んでいくことが解明されています。ただ、共感することを教師が口先で子どもに教えるだけではうわべだけのものになってしまいます。また、教師の前では、共感しているふりをしているだけかも知れません。大切なことは子ども自身に行動に移す機会を与え、実際に共感を経験することだといえます。

この共感する経験を具体的にみてみましょう。例えば実際に老人ホームを子どもが訪れ、自然と老人を尊敬する気持ちを抱くとか、保育者やお母さんのするように泣いている子を慰めてあげたり、クリスマスギフトに自分の玩具を寄付するを経験したり、ボランティアで地域を掃除したりと様々なできるでしょう。互いに助け合うことを通して自然と共感する気持ちを知ることができます。

偏見や態度は、周囲の環境から学ぶものです。その環境にはもちろん保護者、保育者が含まれています。それらを十分に理解した上で、子ども達に道徳に従事する機会を与えて、自己中心性の時代から自立して考えることが出来る子どもを育てていきましょう。

第17回夏季 ピアジェ研修会ぺたぺたシールあそび教材の実践発表



「実践発表について」

日本ピアジェ会 研究員 大石 富士子

ぺたぺたシールあそびの教材指導について、それぞれの園で子どもの理解を深めるための効果的な活用の仕方を継続的に研究を重ねていただき、実践発表も中身の濃い充実した内容となりました。

導入方法も子どもの発達段階に合った興味を引きつけるものを取り上げ、興味を持続させながら楽しい保育を展開し、子ども自身が発見できるように創意工夫されていました。

応用面でも子ども達が自ら考えていける環境作りと言葉掛けにより、生き生きと課題に取り組み、自分の考えを伝えたり、友達の意見も受け入れながら考えていく、自発的な活動を発表していただきました。

また教材の実践だけでなく、それぞれの園での独自の取り組みを発表して下さった園もあり、子ども達のキラキラ輝く素晴らしい表情を見せていただき、幼児教育の素晴らしさを再認識したと同時に新たな課題も見つけることができました。

ご多忙の中発表にご協力頂きました各園の園長先生はじめ先生方、本当にありがとうございました。今後ご協力をどうぞ宜しくお願い致します。



師勝はなの樹幼稚園	発表者：永井美樹 加藤佑里恵
年少編単元3 たりのないものなにあに	目標：不足を補う
ねらい：絵を見ていろいろなものを発見し、それぞれに足りないものに気づき、補う操作で部分と全体のつながりを理解する。	



導入Ⅰでは大方紙芝居を見て幼稚園生活での持ち物について考え、足りないものを発見し補充しました。

導入Ⅱでは、赤いメガネをかけて大型シートを見ると不足部分があることに気づき、何が足りないかを発表しました。メガネをとることで不足していたものが見える仕掛けになっており、子どもの興味や意欲を高める楽しい保育を展開されていました。

別の導入として子ども達に親しみのあるアンパンマンのキャラクターを登場させ、足りないものを発見し補って、全体とのつながりに気づかせていました。年少児が興味関心を持って教材に取り組み、操作を楽しみながら理解できるように工夫されており生き生きとした表情で教材に取り組んでいる子ども達の姿が印象的でした。

東山東幼稚園	発表者：篠原 佳美
年長編単元6 とうみん	目標：倍数の発見
ねらい：同じ数の集まりがいくつできるかを考えていき、倍数を発見していく。	



導入では子ども達が大好きな夜店の品物を用いて同じ数の集まりがいくつできるのかを考えました。6は3の集まりが2つできることや、2の集まりが3つできることや、1の集まりが6つできることを年長児が操作活動を楽しみながら理解していけるように、わかりやすく導いていました。分けた数の集まりを合わせると、元の数の6になることも数字を対応しながら整理シートで再確認できるようにし、理解を深めていました。

応用では、子ども達がグループを作り、同じ数の集まりがいくつできたかを考えました。指導者側が分かれるシートの数を指定するのではなく、子ども達自らが考えてシートを準備し分かれるという活動の中でひとりひとりが意見を出し合い試行錯誤を重ねながら数の倍数を発見することができていました。

鴻池学園幼稚園	発表者：小見山佳子 道明郁香
年中編単元9 どうぶつマンション	目標：空間の位置関係
ねらい：上下、左右、中心の位置関係について気付いていく。	



季節感のある夏祭りの設定で金魚すくいで捕った金魚を入れ物に入れる方法を考え、上下の関係から真ん中の発見、さらに左右、中心の位置関係にも気づくようにし、言語表現もきちんとできるように導いていました。次に的当てで上下、左右を合成した後、お面を9マスの位置関係を考えて並べていき、右上、右下、左上、左下といった位置関係にも気づかせていました。ひとつひとつ段階を追った丁寧な指導がなされていました。

応用では園庭の木々や遊具を観察し、その後部屋に戻って頭の中で位置を再構成して地図を作成する取り組みをされていました。上から見た視点で、位置を表現したり、基準から見てどの位置かを矢印で表現したりとさまざまな表現があり、楽しく取り組みながら位置関係を考えている様子がよく伺えました。



文学紀行NO.27

わたしはだれ？

児童文学研究家 石川 晴子

今回ご紹介する絵本は『わたし』
谷川俊太郎文 長新太絵 福音館書店

わたしはだれでしょう？というクイズがあります。たとえば、「わたしは海に住んでいます。海の中ではいちばん大きな動物です。時々潮を吹きます。わたしはだれでしょう？」と聞かれて答える遊びです。そう、答えは「鯨！」とても簡単です。では、答えがあなた自身になるように問題を作ってください、といわれたら、どうでしょうか。

「わたしは、日本の首相です」とか、「××の歌をうたっている歌手です」とか、「さくら組の担任です」などのヒントが出せるひとなら、簡単にわかってもらえるでしょう。だれでも知っている社会的な立場や、多くのひとが特定できる特徴は、他のひとから見てもだれのことわかりやすいからです。でも、だれもがそのようなヒントが出せるわけではありません。こどもだったらどうでしょ

う。

「わたしは、なにものか？」仕事や業績などは、もちろん、そのひとと切り離せないないそのひとの一部です。しかし、ひとは、いつも仕事をしているわけではないし、家に帰れば社会的な立場から離れて「自分」にかえるでしょう。その「自分」は、じつは、社会と関わっているときにも隠れていたり、表に出てきたりします。「自分」を自分でコントロールできることもあれば、自分でもどうしようもないこともあります。どれほど「自分」とつきあうことができるか、これはおとなになる過程で身につけていきたいせつな課題といえるでしょう。

さて、ここに一冊の絵本があります。表紙の真ん中で、女の子がひとり、立ってこっちを見えています。表紙をあけて中を読んでみましょう。同じ女の子が立っています。「わたし」「おとこのこからみるとおんなのこ」「あかちゃんからみるとおねえちゃん」「おにいちゃんからみるといもうと」「おかあさんからみるとむすめのみちこ」「おとうさんからみてもむすめのみちこ」・・・おばあちゃんからみると

孫、おじさんからみると姪・・・ 家族や親戚から見ると、それぞれとの関係のちがいがから呼び方が変わります。みちこちゃんは、家から幼稚園、あるいは学校へ行きます。すると、また、呼び方が変わります。「せんせいからみると せいと」で、お隣のおばさんから見ると、山口さんちのお子さんです。ここから調子が変わり、犬からは人間だし、宇宙人から見れば地球人です。お医者さんから見ると、「やまぐちみちこ、5さい」です。ついでに、レントゲンで見るとガイコツ！です。映画館では、こども。そして、知らない人から見れば、「だれ？」知らないよそのこどもです。歩行者天国のような群集にまぎれこめば、おおぜいのなかのひとりです。

わたし



「わたし」は「わたし」にとっていちばん大事な存在です。家族にとっても、かけがいのない大切な存在です。でも、いつも、どこでも、いちばん大事なひとではありません。「わたし」は、すこし大きくなると、あちこちに出かけていきます。出かけて行ったところで、呼び方が変わります、「みちこ」とか「みちこちゃん」とか「みっちゃん」と呼んでくれるひとばかりではありません。「お子さん」だったり、「こども、ひとり」だった

り、「どこかの子」だったり、どこの子かわからなくて「まいご」といわれることがあるかもしれません。「わたし」はひとりきりなのに、そこにいるひとにとっては、別のいろいろなひとになります。ただひとりっきりの大切な存在であり、同時に相対的な存在でもあります。

そして、どのひとも同じように、みんなそれぞれ絶対に他のひとと代われない大切な存在であると同時に世界中の何億というひとのひとりです。

2013年の夏は、ことに暑い日がつづきました。酷暑にめげず研修会では、いつものように熱心な参加者が集い充実した勉強ができました。ロス・アンジェルズから来られた斉藤法子先生の基調講演のテーマは、「道徳」でした。自己認識が自己中心的な状態から段階を踏んでしだいに相対的な自立した自己像の認識へと成長していくことが、健全な道徳を身につけるのに欠かせないことが、わかりやすく例をあげて語られました。

あかちゃんは、わたしたちと同じように話せるようになるまでには、およそ2年ほどかかります。話せるようになって、なかなか、自分のことを「わたし」と呼ぶようにはなりません。わたしには、あかちゃんがじっくり時間をかけて「自分」になっていくように思われます。この『わたし』という少し変わった絵本は、自分とはなにかをみつめるきっかけになるのではないのでしょうか。こどもといっしょにゆっくりと読んでみるとよいと思います。物語の本ではないので、話し合いながら、たのしむことができます。

少し大きいひと向きですが、同じ作家と画家による『あなた』という絵本も出ています。

突然ですが、人間はやっぱり
笑顔が好きです！ 突いじわがふ
ふと 笑って過したいものです。





ピアジェ研究所

学校法人 鴻池学園第3幼稚園敷地内
〒573-0104

大阪府枚方市長尾播磨谷1-4051

Tel 072(855)3777 Fax072(855)3779

All right reserved Jean Piaget Society Japan